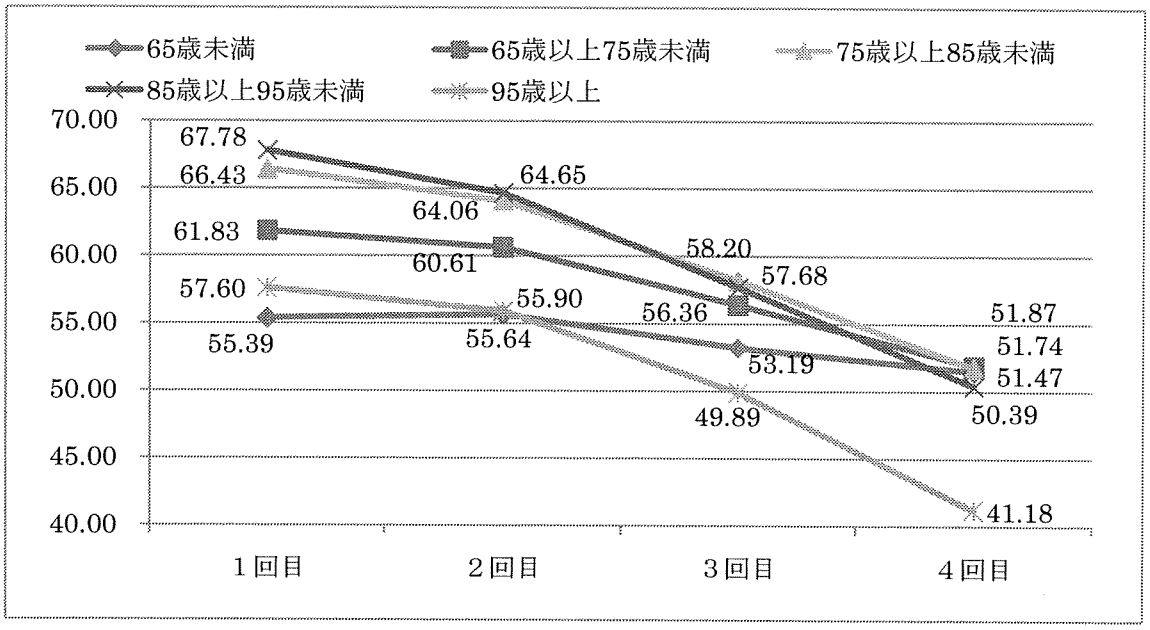

図 2-29　年齢階層別第 5 群（身の回りの世話等関連）の中間評価項目得点の経年的変化（男性）

② 女性

女性においては、65 歳未満おいて 1 回目から 2 回目において有意差は見られなかった。その他については、全体の年齢階層別分析と同様、すべての認定回数すべての年齢階層において 1 回目から 4 回目にかけて、回数を経るごとに有意に得点が低下していた。

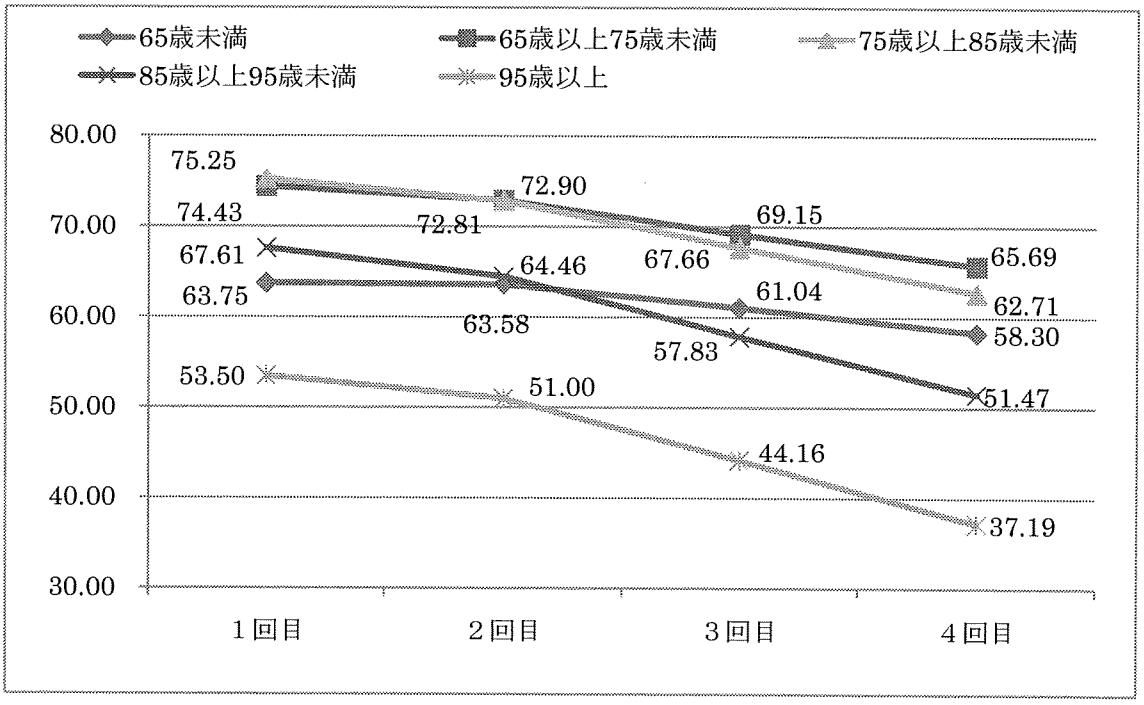

図 2-30　年齢階層別第 5 群（身の回りの世話等関連）の中間評価項目得点の経年的変化（女性）

5. 第６群（コミュニケーション等関連）中間評価項目得点の経年的変化

1） 調査対象者全体

要介護高齢者における第 6 群（コミュニケーション等関連）の中間評価項目得点は、1 回目 89.77 点、2 回目 82.44 点、3 回目 85.58 点、4 回目 88.27 点と回数を経るごとに点数が有意に低下していた。

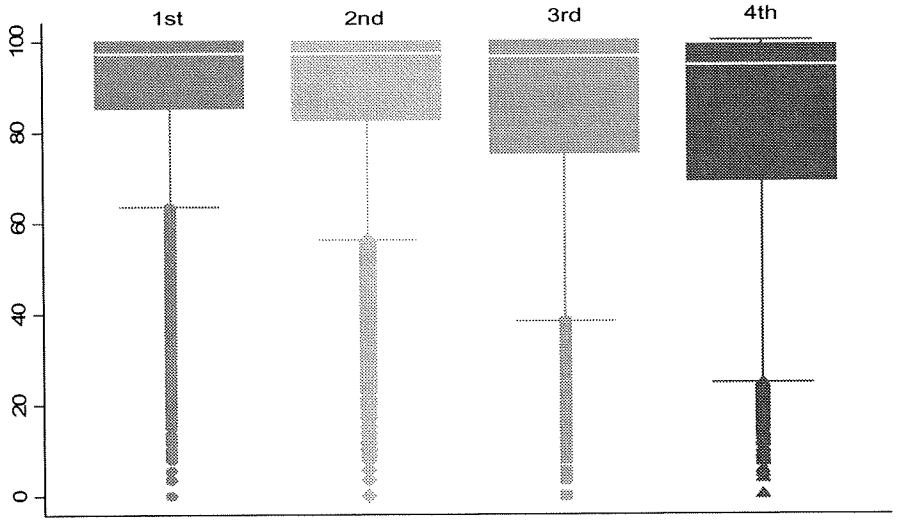

図 2-31 第6群（コミュニケーション等に関連する項目）の中間評価項目得点の推移（ボックスチャート）

2） 男女別

男女別に要介護高齢者における第 6 群（コミュニケーション等関連）の中間評価項目得点を比較した結果、男女ともに回数を経るごとに得点は有意に低下していた。また、女性が男性より得点が有意に高い傾向が見られのは、2 回目と 3 回目のみであった。

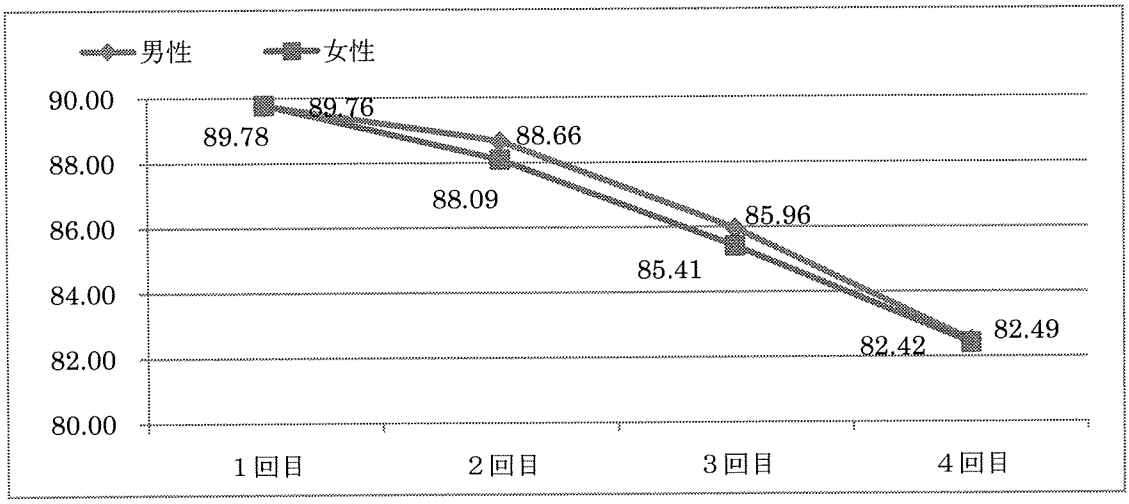

図 2-32 男女別第6群（コミュニケーション等関連）の中間評価項目得点の経年的変化

3） 年齢階層別

年齢階層別に要介護高齢者における第 6 群（コミュニケーション等関連）の中間評価項目得点を比較した結果、65 歳未満の 1 回目から 2 回目にかけて、得点が有意に上昇していたが、その他については、いずれの認定回数においても回数を寝るごとに点数が有意に低下していた。

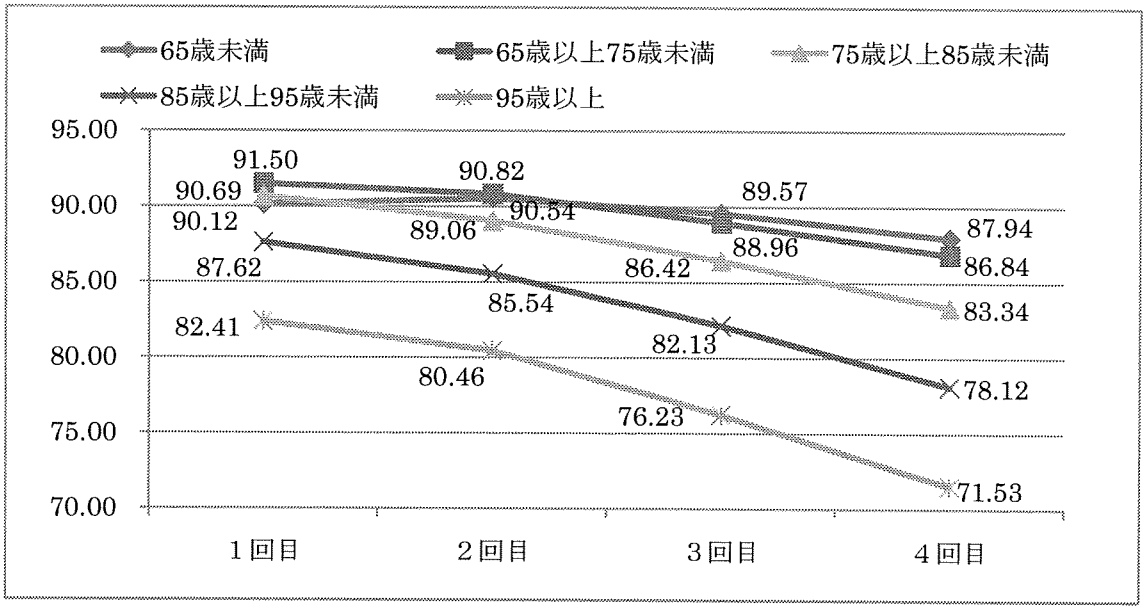

図 2-33 年齢階層別第 6 群（コミュニケーション等関連）の中間評価項目得点の経年的変化

4） 男女別年齢階層別

① 男性

男女別年齢階層別に要介護高齢者における第 6 群（コミュニケーション等関連）の中間評価項目得点を比較した結果、男性においては、65 歳未満については 1 回目から 2 回目にかけてわずかに得点が上層していたが、そのほかの年齢階層については、いずれの認定回数においても、1 回目から 4 回目にかけて、回数を経るごとに有意に得点が低下していた。

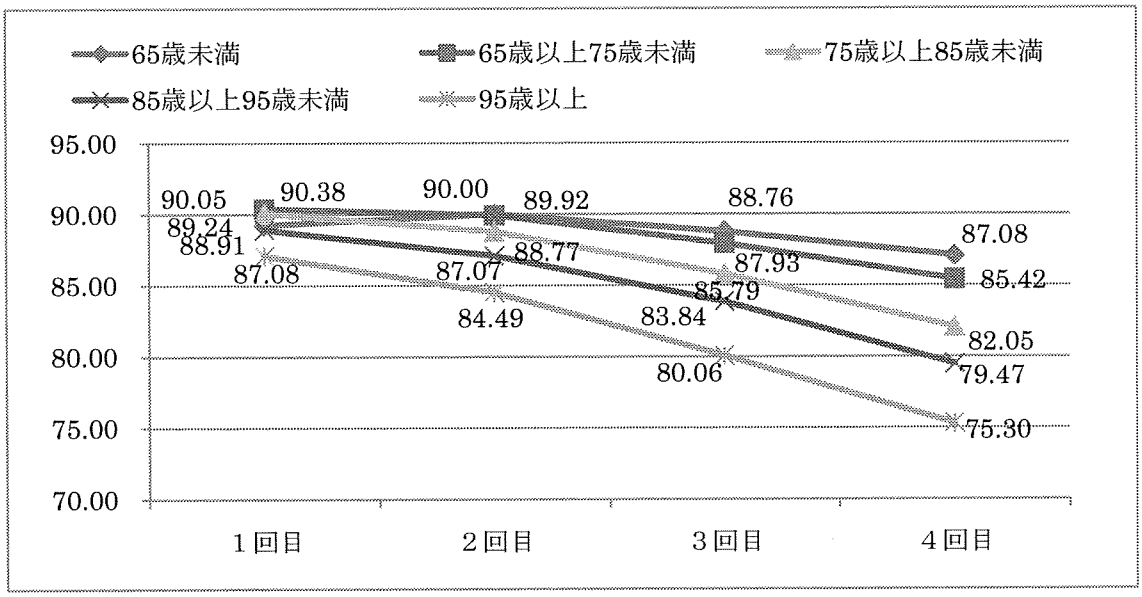

図 2-34 年齢階層別第 6 群（コミュニケーション等関連）の中間評価項目得点の経年的変化（男性）

② 女性

女性においては、65 歳未満おいて 1 回目から 2 回目においては有意差は見られなかったが、その他は、全体の年齢階層別分析と同様に、すべての認定回数すべての年齢階層において 1 回目から 4 回目にかけて、回数を経るごとに有意に得点が低下していた。

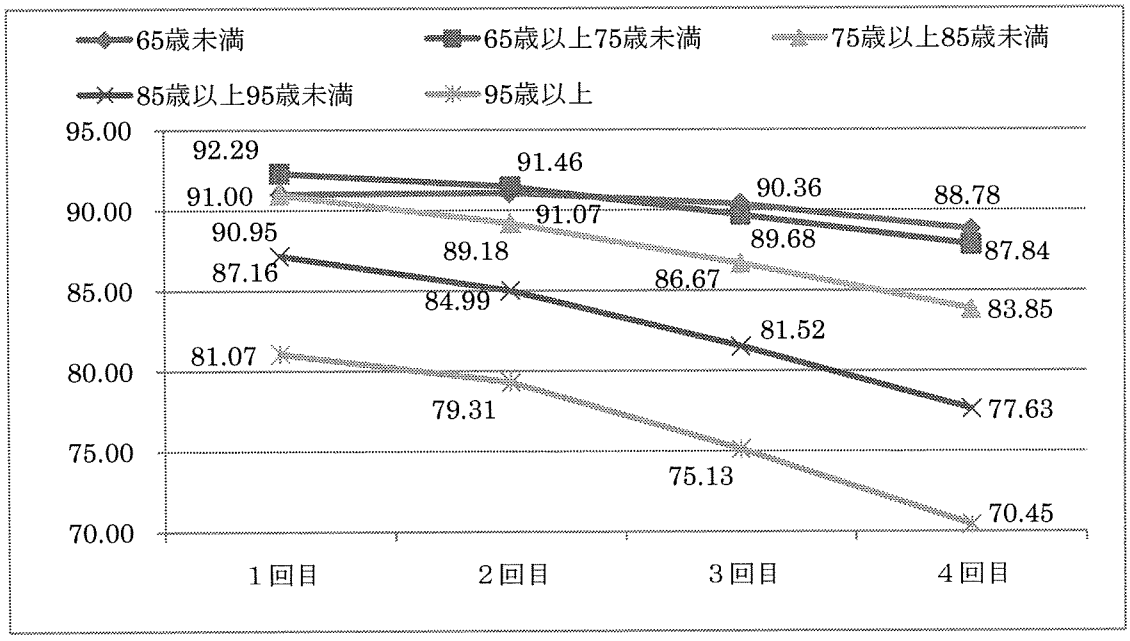

図 2-35 年齢階層別第 6 群（コミュニケーション等関連）の中間評価項目得点の経年的変化（女性）

6. 第７群（問題行動関連）中間評価項目得点の経年的変化

1） 調査対象者全体

要介護高齢者における第７群（問題行動関連）の中間評価項目得点は、１回目 93.31 点、２回目 93.20 点、３回目 92.68 点、４回目 92.47 点と回数を経るごとに点数が有意に低下していた。

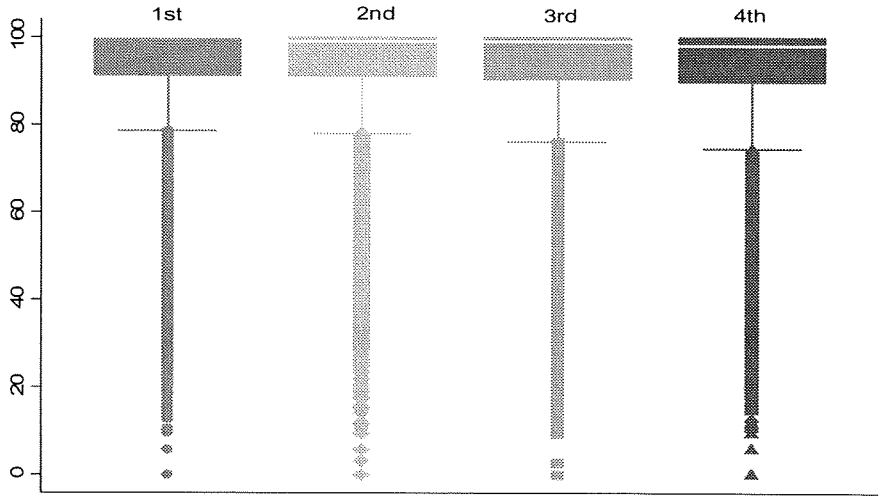

図 2-36　第７群（問題行動関連）の中間評価項目得点の推移（ボックスチャート）

2） 女別

男女別に要介護高齢者における第 7 群（問題行動関連）の中間評価項目得点を比較した結果、男性における 1 回目から 2 回目にかけてのみに有意差が見られず、その他の認定回数間においては回数を経るごと点数が有意に低下していた。男女差は、これまでの点数とは逆に男性のほうがいずれの認定回数においても有意に高い傾向が示された。

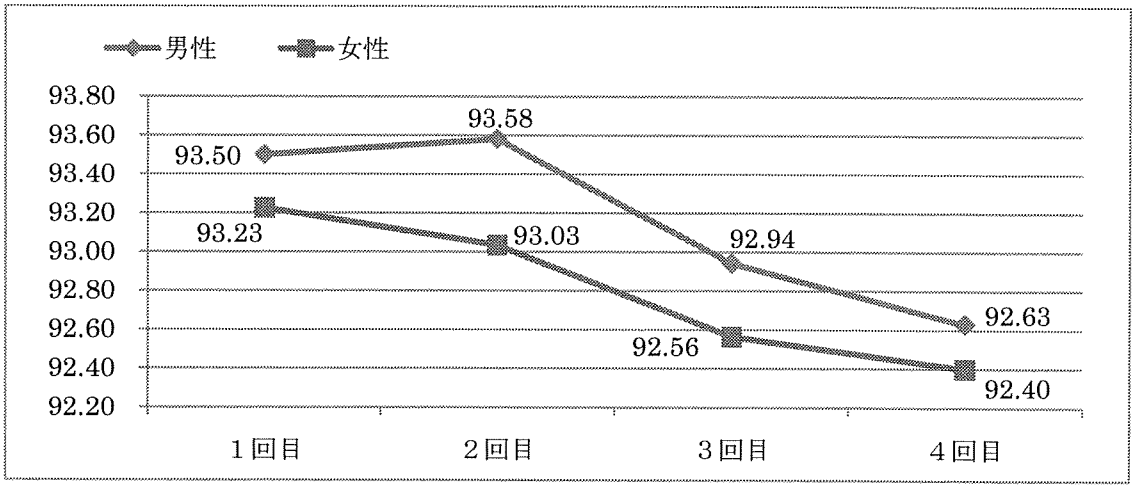

図 2-37　男女別第７群（問題行動関連）の中間評価項目得点の経年的変化

3） 年齢階層別

年齢階層別に要介護高齢者における第 7 群（問題行動関連）の中間評価項目得点を比較した結果、他の中間評価項目得点とは大きく傾向が異なり、認定回数ごとの経年的な得点の低下がみられたのは、75 歳以上 85 歳未満および 85 歳以上 95 歳未満のみであった。65 歳以上 75 歳未満については、2 回目から 3 回目にかけてのみ有意に得点が低下していたが、他には有意な差はなかった。

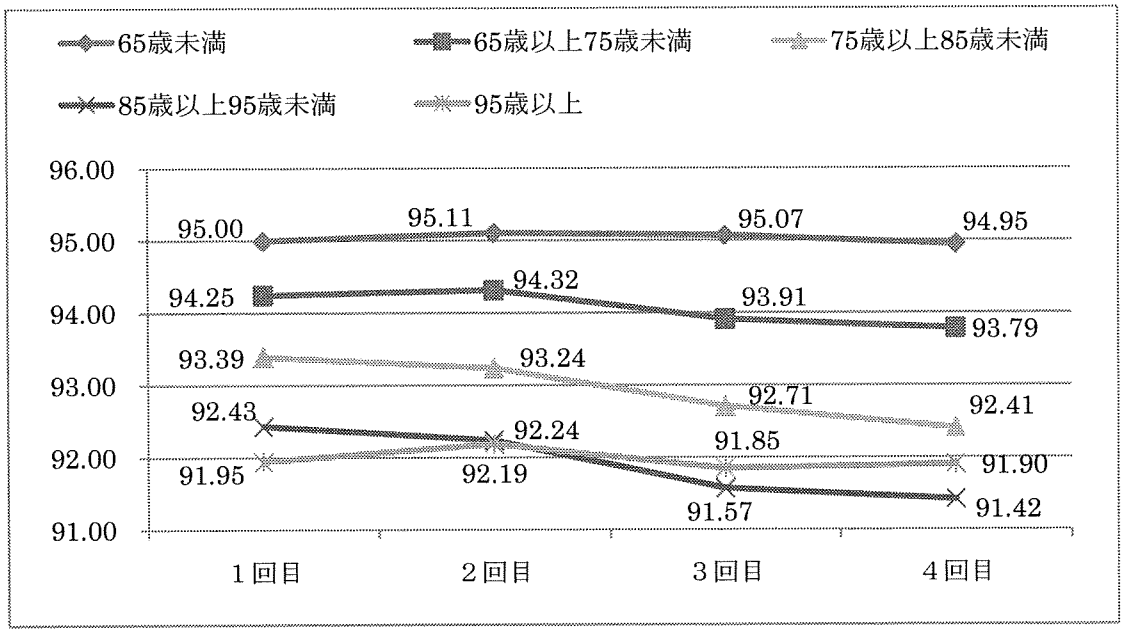

図 2-38 年齢階層別第 7 群（問題行動関連）の中間評価項目得点の経年的変化

4） 男女別年齢別階層別

① 男性

男女別年齢階層別に要介護高齢者における第 7 群（問題行動関連）の中間評価項目得点を比較した結果、男性においては、1 回目から 2 回目にかけてはいずれの年齢階層においても、有意差は見られなかった。その他の認定回数間については、全体の年齢階層別の分析と同様、75 歳以上 85 歳未満および 85 歳以上 95 歳未満のみ経年的な得点の低下がみられた。

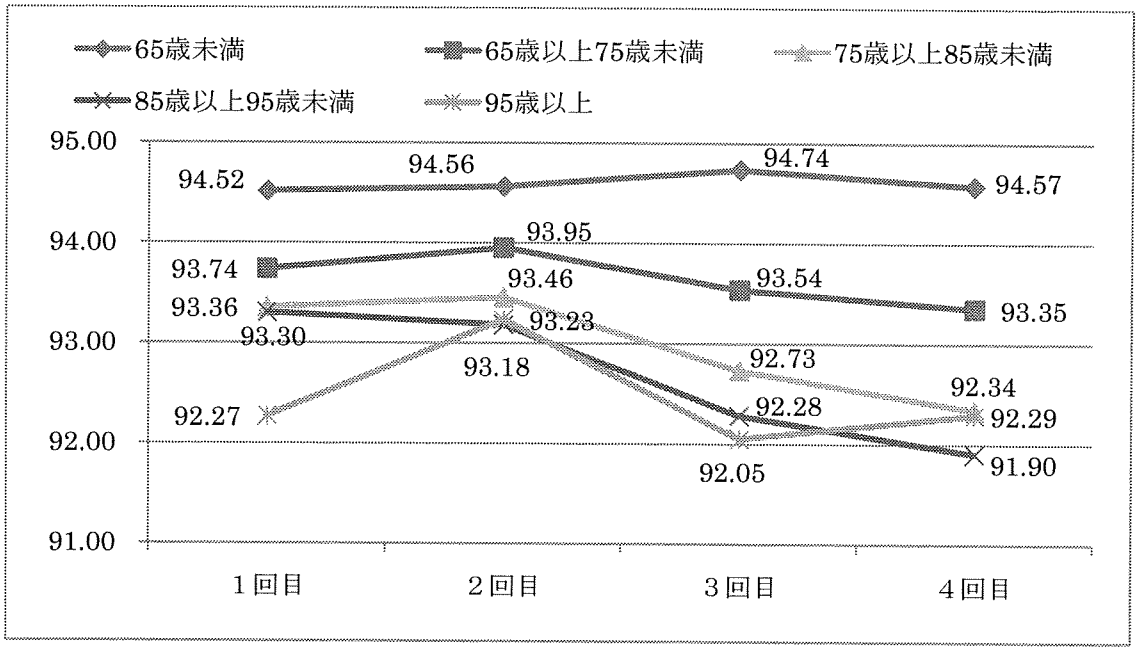

図 2-39　年齢階層別第７群（問題行動関連）の中間評価項目得点の経年的変化（男性）

②　女性

女性においては、１回目から４回目のすべての認定回数間に有意に得点が低下したのは、75 歳以上 85 歳未満のみであった。また、65 歳以上 75 歳未満においては、２回目と３回目のみ、85 歳以上 95 歳未満は１回目から３回目にかけて得点が有意に低下していた。

なお、65 歳未満および 95 歳以上については、すべての認定回数において得点の変動について有意差が示されなかった。

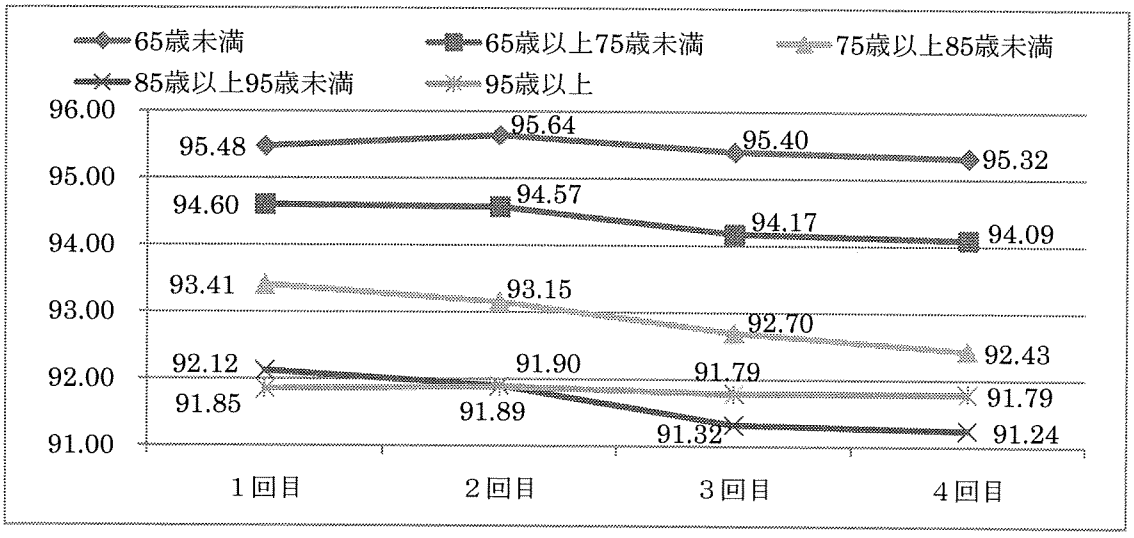

図 2-40　年齢階層別第７群（問題行動関連）の中間評価項目得点の経年的変化（女性）

7. まとめ

(1) 要介護認定等基準時間

調査対象の要介護認定基準時間は、1回目から2回目にかけては、ほとんど変化はなく、統計的有意差も見られなかった。また、2回目以降の認定基準時間については、いずれも回を重ねるごとに長くなる傾向が示された。これは年齢階層別に分析の結果についても同様であった。

認定回数ごと得点の男女差については、男性は女性よりいずれの認定回数においても時間が有意に長かった。男女別の経年的変化においては、1回目と2回目に特徴があり、有意差は示されなかったものの、男性は時間が短くなる傾向があった一方で女性の時間は長くなっており、男女の経年的変化の傾向に違いがあるものと推察された。

年齢階層別の経年的変化についても、1回目から2回目には特徴が見られ、65 歳未満、65 歳以上 75 歳未満については、要介護認定基準時間が有意に低下、すなわち介護の手間に関わる時間が短くなっていた。しかし、それ以降の年齢階層では、95 歳以上を除き有意に長くなっていた。

また、男女別年齢階層別の経年的変化においては、男性は1回目から2回目にかけては、65 歳未満のみ有意に時間が低下していた。しかし、75 歳以上には、有意差はなく、65 歳未満の男性においてのみの傾向が示されていたものと考えられた。

女性は、1回目から2回目にかけて、75 歳以上 85 歳未満、85 歳以上 95 歳未満では有意に時間が長くなっていたが、その他の群では、長くなる傾向はみられたものの、有意な差はなかった。

このように男女別年齢階層別にみると、1回目から2回目にかけて男性 65 歳未満において時間が減少し、女性の 75 歳以上 95 歳未満において時間が増加していた。この結果は、要介護高齢者において、男女別、年齢階層別に、経年的変化が異なる群があることを示したといえ重要である。

(2) 第1群（麻痺・拘縮等）

調査対象の第1群（麻痺・拘縮等）の中間評価項目得点は、認定を受けるたびに有意に低下しており、状態が悪くなる傾向があったが、変動係数も回数が増加するほど大きくなっており、個人差が大きいことが推察された。また、2回目以降の得点については、いずれも回を重ねるごとに高くなる傾向が示された。これは年齢階層別にも同様の傾向であった。

いずれの認定回においても女性の得点が男性の得点よりも有意に高く、状態が良いことを示していた。男女別の経年的変化をみると、要介護高齢者における第1群（麻痺・拘縮

等）の中間評価項目得点は、すべての年齢階層において 1 回目から 4 回目にかけて、回数を経るごとに有意に得点が低下していた。これは年齢階層別にも同様の傾向であった。

さらに、男女別年齢階層別にの経年的変化をみると、女性では、いずれの年齢階層においても認定回数を経るごとに得点が低下していたが、男性は、65 歳未満の 2 回目から 3 回目、95 歳以上の 1 回目から 2 回目にかけては、有意な低下は示されなかった。つまり、男性の最も高齢群である 95 歳以上の 1 回目から 2 回目にかけてと、最も若年群である 65 歳未満の 2 回目から 3 回目を除いて、男女ともに、他の年齢階層では、経年的に悪化する傾向が見られた。

(3)　第２群（移動等に関連する項目）

調査対象の第 2 群（移動等関連）の中間評価項目得点は、認定回数を経るごとに得点が有意に低下する傾向があり、いわゆる状態が悪くなる傾向が示された。しかし、変動係数も回数が増加するほど大きくなっており、個人差が年齢を経るごとに大きくなることを示していた。2 回目以降の得点は、認定回を重ねるごと低下する傾向が示された。これは層別に分析を行っても同様の傾向であった。

認定回数ごとの男女差は、1 回目、4 回目において男性より女性のほうが有意に高かったが、2 回目および 3 回目については、有意差が見られなかった。男女別の経年的変化をみると、男性は、1 回目から 2 回目にかけて有意差はなかった。

年齢階層別に比較した結果、1 回目から 2 回目にかけて 65 歳以上 75 歳未満および 95 歳以上については有意差が見られなかった。また、その他の 1 回目から 2 回目については、65 歳未満は有意に得点が高くなっていたが、75 歳以上 85 歳未満および 85 歳以上 95 歳未満については、逆に低下していた。

男女別年齢階層別に比較した結果、男性は、85 歳以上 95 歳未満および 95 歳以上の 1 回目から 2 回目にかけては変化はなく、65 歳未満と 65 歳以上 75 歳未満にかけてのみ、得点が有意に上昇していた。

女性は、65 歳未満、65 歳以上 75 歳未満、95 歳以上の 1 回目から 2 回目にかけては変化はなく、男性では、85 歳以上 95 歳未満の 1 回目から 2 回目にかけて、有意差は見られなかったが、女性においては有意に得点が低下していた。

認定回数ごとの得点の男女差が見られなかった（2・3 回目が有意差なし）。1 回目から 2 回目にかけて、年齢階層別にみると、65 歳未満と 65 歳以上 75 歳未満では上昇し、75 歳以上 85 歳未満および 85 歳以上 95 歳未満については、逆に低下するなど年齢階層での相違が顕著であった。

(4)　第３群（複雑な動作等に関連する項目）

調査対象の第 3 群（複雑な動作等関連）の中間評価項目得点は、認定回数を経るごとに得点が有意に低下する傾向があり、いわゆる状態が悪くなる傾向が示され、変動係数も回数が増加するほど大きくなっていた。また、２回目以降の得点については、いずれも回を重ねるごと低下する傾向が示された。これは層別分析の結果も同様であった。

認定回数ごと得点の男女差は、いずれの認定回数においても、女性が男性より得点が有意に高かった。

年齢階層別に比較した結果、1 回目から 2 回目にかけて、最も若年層である 65 歳未満の得点が上昇し、次に若い 65 歳以上 75 歳未満においては有意差は見られなかったが、75 歳以上の年齢階層については、有意に得点が低下していた。

男女別年齢階層別には、男性は、全体の年齢階層別分析と 1 回目から 2 回目にかけて、95 歳以上において有意差は見られなかっただけで、これ以外は、低下していた。

女性はいずれの年齢階層においても有意に低下していた。

第 3 群（複雑な動作等関連）は、男性の最も若い 65 歳未満の得点は高くなり、次に若い 65 歳以上 75 歳未満および 95 歳以上においては、変化がなかった以外は、女性と同様に有意に得点が低下していた。

(5)　第４群（特別な介護等関連）

調査対象の第 4 群（特別な介護等関連）の中間評価項目得点は、認定回数を経るごとに得点が有意に低下していた。変動係数も回数が増加するほど大きくなり個人差が大きいことがわかった。また、２回目以降の得点も回を重ねるごとに低下していた。

年齢階層別に比較した結果、1 回目から 2 回目にかけて 65 歳未満では有意差は見られず、変化はなかったが、その他の年齢階層については得点が有意に低下していた。

男女別年齢階層別に比較した結果、男性は、1 回目から 2 回目にかけて 65 歳以上 75 歳未満および 95 歳以上では変化がなく、その他の年齢階層では得点が有意に低下していた。

女性は、1 回目から 2 回目にかけて 65 歳以上 75 歳未満で変化はなかったが、その他の年齢階層では得点が有意に低下していた。

第 4 群（特別な介護等関連）では、65 歳未満、男性の 65 歳以上 75 歳未満および 95 歳以上、女性の 65 歳以上 75 歳未満以外は経年的に得点が低下（悪化）している傾向が示されていた。

(6)　第５群（身の回りの世話等関連）

調査対象の第 5 群（身の回りの世話等関連）の中間評価項目得点は、認定回数を経るご

とに得点が有意に低下する傾向があり、いわゆる状態が悪くなる傾向が示された。同時に変動係数も回数が増加するほど大きくなり、個人差が大きくなっていた。また2回目以降の得点は、いずれも回を重ねるごとに低下していた。

認定回数ごと得点の男女差は、いずれの認定回数においても、女性が男性より得点が有意に高かった。

年齢階層別に分析した結果からは、1回目から2回目の得点の変化を比較すると、65歳未満を除き、有意に得点が低下していた。男性は、65歳未満に加えて95歳以上においても1回目から2回目において有意差はなかった。

第5群（身の回りの世話等関連）では、男性より女性のほうが得点が高く、男女ともに最も若年層である65歳未満においては1回目から2回目にかけては変化がなかった。

(7) 第6群（コミュニケーション等関連）

調査対象の第6群（コミュニケーション等関連）の中間評価項目得点は、認定回数を経るごとに得点が有意に低下していた。変動係数も回数が増加するほど大きくなり、個人差が大きくなっていた。2回目以降の得点は、いずれも回を重ねるごと低下する傾向が示された。

認定回数ごとの得点の男女差は、他の群とは異なり、女性が男性より得点が有意に高い傾向が見られのは、2回目と3回目のみであった。1回目から2回目の得点の経年的変化については、年齢階層別に比較した結果、最も若年層である65歳未満については、低下が見られず、女性は変化がなく、男性は有意に得点が上昇するという他の年齢階層とは異なる傾向が示された。

このように第6群（コミュニケーション等関連）は、男女差が顕著でないことが特徴であった。また若年層の1回目から2回目かけて改善の傾向が見られるという点も第2群（移動等関連）に類似した傾向であり、コミュニケーション機能の経年的変化の特徴といえる。

(8) 第7群（問題行動関連）

調査対象の第7群（問題行動関連）の中間評価項目得点は、認定回数を経るごとに得点が有意に低下していた。また男性は、1回目から2回目にかけては、低下していなかった。

認定回数ごと得点の男女差については、これまでの点数とは逆に男性のほうがいずれの認定回数においても有意に高かった。年齢階層別に比較した結果、他の中間評価項目得点とは大きく傾向が異なり、認定回数ごとの経年的な得点の低下がみられたのは、75歳以上85歳未満および85歳以上95歳未満のみであった。65歳以上75歳未満については、2回目から3回目にかけてのみ有意に得点が低下していたが、他には有意な差はなかった。

男女別年齢階層別に比較した結果、男性は、1回目から2回目にかけてはいずれの年齢階層においても、有意差は見られなかった。その他の認定回数間については、全体の年齢階層別の分析と同様、75歳以上85歳未満および85歳以上95歳未満のみ経年的な得点の低下がみられた。

女性においては、1回目から4回目のすべての認定回数間に有意に得点が低下したのは、75歳以上85歳未満のみであった。また、65歳以上75歳未満においては、2回目と3回目のみ、85歳以上95歳未満は1回目から3回目にかけて得点が有意に低下していた。

第7群（問題行動関連）は、男性のほうが女性より得点が高いという点、また経年的変化が特定の年齢階層に限られる点等その他の群と異なっった経年的変化をしていることがわかった。

第3章 ケア提供場所別要介護高齢者の性別・年齢別・状態別にみた健康状態

本章では、ケア提供場所別に要介護高齢者の性別・年齢別・状態別にみた健康状態に関する分析を行った結果を示した。

1. 性別

性別をケア提供場所別にみると、一番女性が多かったのが、介護老人福祉施設 79.8%、続いて、介護老人保健施設 77.0%であった。女性の割合は少なかったのは、保険以外の施設 65.0%、続いて介護療養型医療施設で 67.5%であった。

2. 年齢

年齢について、ケア提供場所別にみると、一番平均年齢が高かったのが介護老人福祉施設 83.0 歳、続いて、介護老人保健施設 82.9 歳、居宅 80.2 歳であった。

3. ケア提供場所別平均要介護度、要介護度別人数等

要介護度は、要支援を０、要介護１を１、要介護２を２、要介護３を 3、要介護４を 4、要介護５を 5 とした場合の平均値をケア提供場所別に比較した。この結果、一番平均値が高かったのが介護老人福祉施設 2.73 であった。続いて、介護老人保健施設 2.61、介護療養型医療施設 2.41 であった。

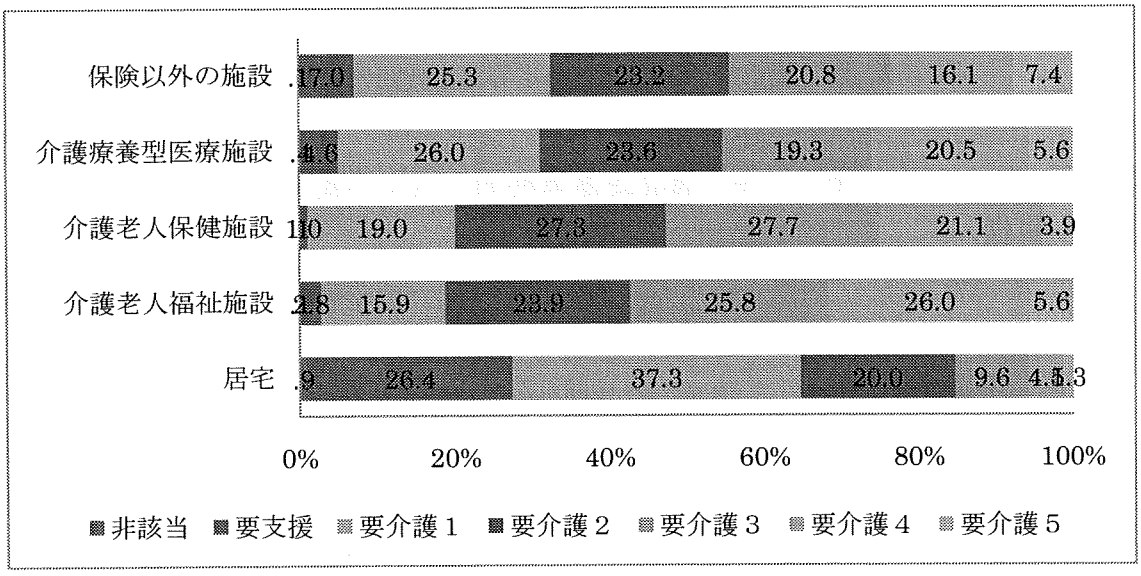

図 3-1 ケア提供場所別要介護者の要介護度の分布

4. 要介護認定等基準時間の経年的変化

1) ケア提供場所別

ケア提供場所別要介護高齢者における要介護認定基準時間を比較した結果、介護療養型の 1 回目から 2 回目にかけては有意差がなかったが、その他のいずれの場所においても認定回数ごとの変動に有意差が見られた。

時間が有意に低下していたのは、「保険以外の施設」の 1 回目から 2 回目にかけてのみで、これ以外の提供場所では、要介護認定基準時間は有意に上昇していた。

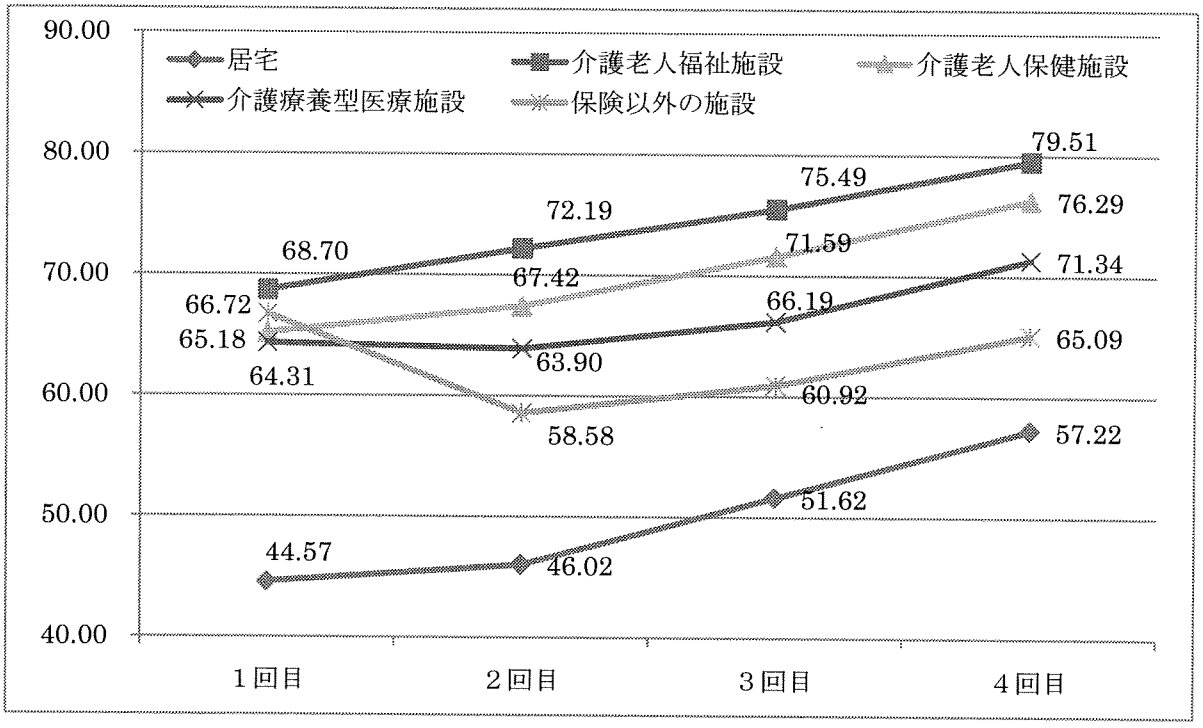

図 3-2 ケア提供場所別要介護認定等基準時間の経年的な変化

2) 男女別ケア提供場所別要介護認定基準時間の経年的変化

① 男性

男性は、居宅および介護老人福祉施設においては、認定回数を経るごとに有意に上昇する傾向が示された。一方、介護老人保健施設は 2 回目と 3 回目、3 回目と 4 回目のみで有意に上昇し、介護療養型施設では、3 回目と 4 回目のみで時間が有意に上昇していた。保険以外の施設は 1 回目から 2 回目の間に有意に減少したが、その後は、時間は有意に増加していた。

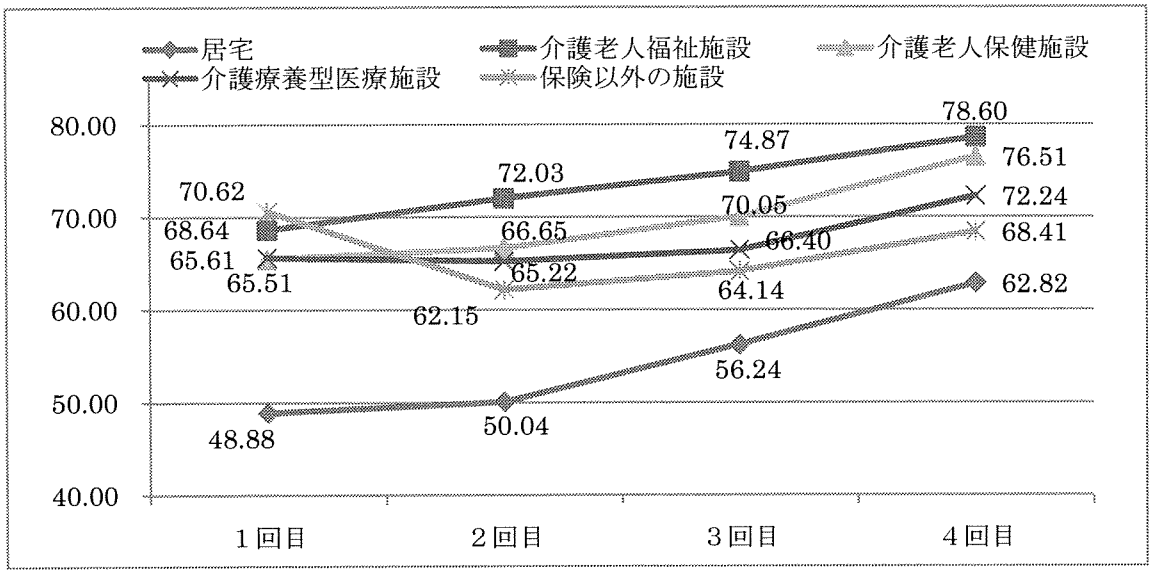

図 3-3　男性のケア提供場所別要介護認定等基準時間の経年的な変化

② 女性

女性は、ケア提供場所別の全体分析と同様に介護療養型の 1 回目から 2 回目にかけて、有意差が見られなかった以外は、いずれの場所においても認定回数ごとの変動に有意差が見られた。時間が有意に減少していたのは、「保険以外の施設」の 1 回目から 2 回目にかけてのみで、この他では、時間が有意に上昇していた。

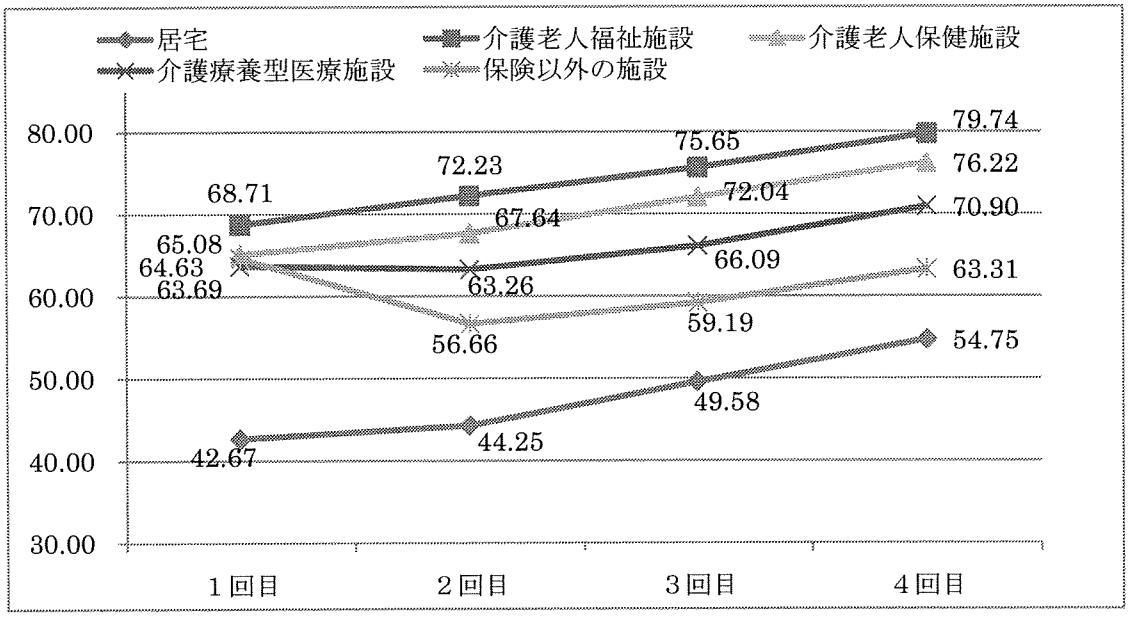

図 3-4　女性のケア提供場所別要介護認定等基準時間の経年的な変化

5. 第１群（麻痺・拘縮関連）の経年的変化

1） ケア提供場所別

ケア提供場所別に要介護高齢者における第１群（麻痺・拘縮等）の中間評価項目得点を比較した結果、介護療養型医療施設の２回目から３回目にかけてだけは有意差がなかったが、それ以外は、いずれの施設においても認定回数を経るごとに有意に得点が低下していた。

また、１回目から４回目まで、居宅が最も得点が高く、次いで保険以外の施設、介護老人保健施設、介護療養型医療施設と続き、最も低いのが介護老人福祉施設であった。

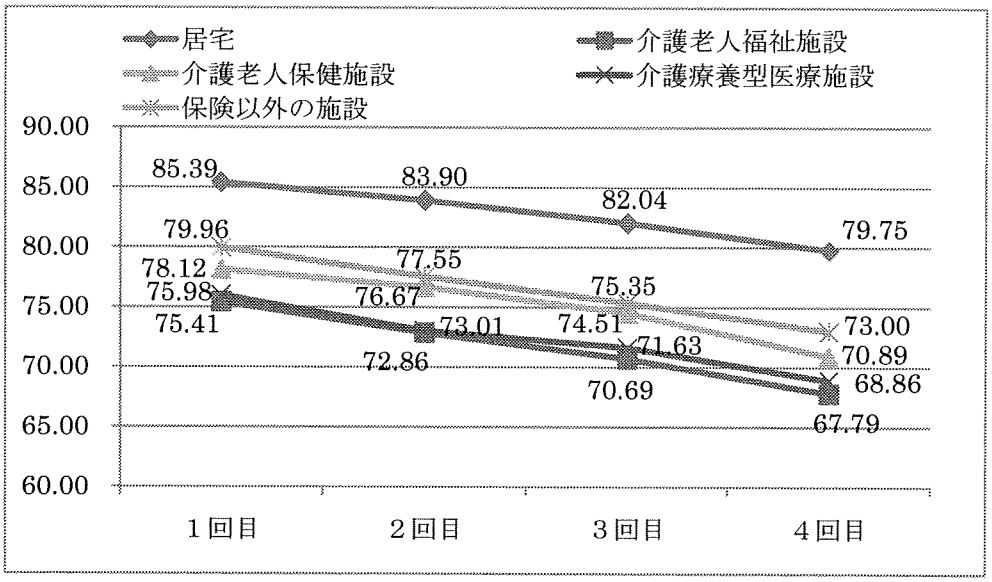

図 3-5 ケア提供場所別第１群（麻痺・拘縮等）の中間評価項目得点の経年的な変化

2） 男女別ケア提供場所別第１群（麻痺・拘縮等）の中間評価項目得点の経年的変化

① 男性

男性は、１回目から４回目にかけて全ての認定回で有意に低下していたのは、居宅および保険以外の施設のみであった。介護老人福祉施設においては、１回目から２回目、介護老人保健施設においては３回目から４回目、介護療養型施設においては１回目から２回目、３回目から４回目のみに有意な低下が見られた。

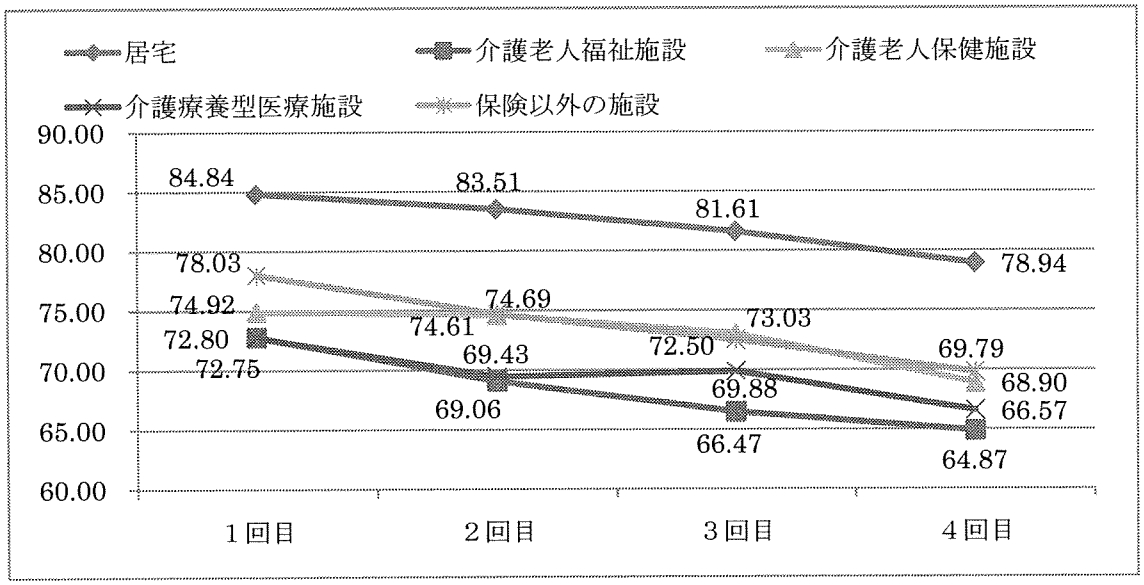

図 3-6　男性のケア提供場所別第1群（麻痺・拘縮等）の中間評価項目得点の経年的な変化

② 女性ケア提供場所別

女性においては、いずれの施設においても認定回数毎に有意に得点が低下していた。また、1回目から4回目まで、居宅が最も得点が高く、次いで保険以外の施設、介護老人保健施設、介護療養型医療施設と続き、最も低いのが介護老人福祉施設であった。

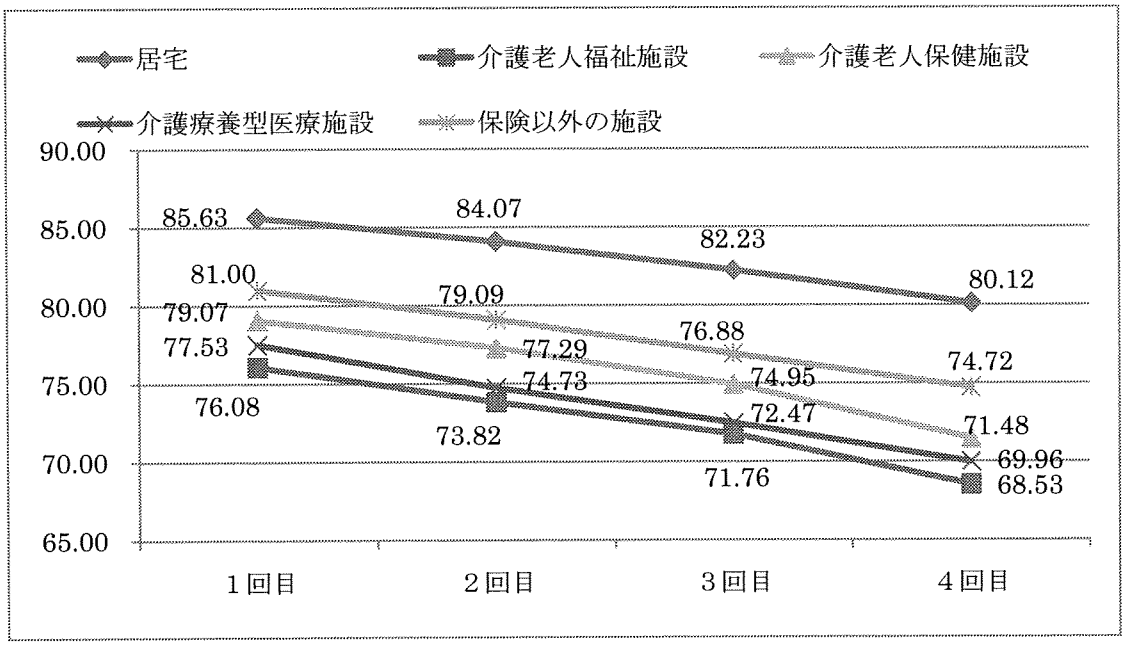

図 3-7　女性のケア提供場所別第1群（麻痺・拘縮等）の中間評価項目得点の経年的な変化

6. 第２群（移動等関連）の経年的な変化

1） ケア提供場所別

ケア提供場所別に要介護高齢者における第 2 群（移動等関連）の中間評価項目得点を比較した結果、保険以外の施設において、1 回目から 2 回目にかけて得点が有意に上昇していた。

その他においては、介護療養型施設において、1 回目から 2 回目にかけて有意差が見られなかった以外は、いずれの施設においても認定回数を経るごとに有意に得点が低下していた。また、2 回目から 4 回目まで、居宅が最も得点が高く、次いで保険以外の施設、介護老人保健施設、介護療養型医療施設と続き、最も低いのが介護老人福祉施設であった。

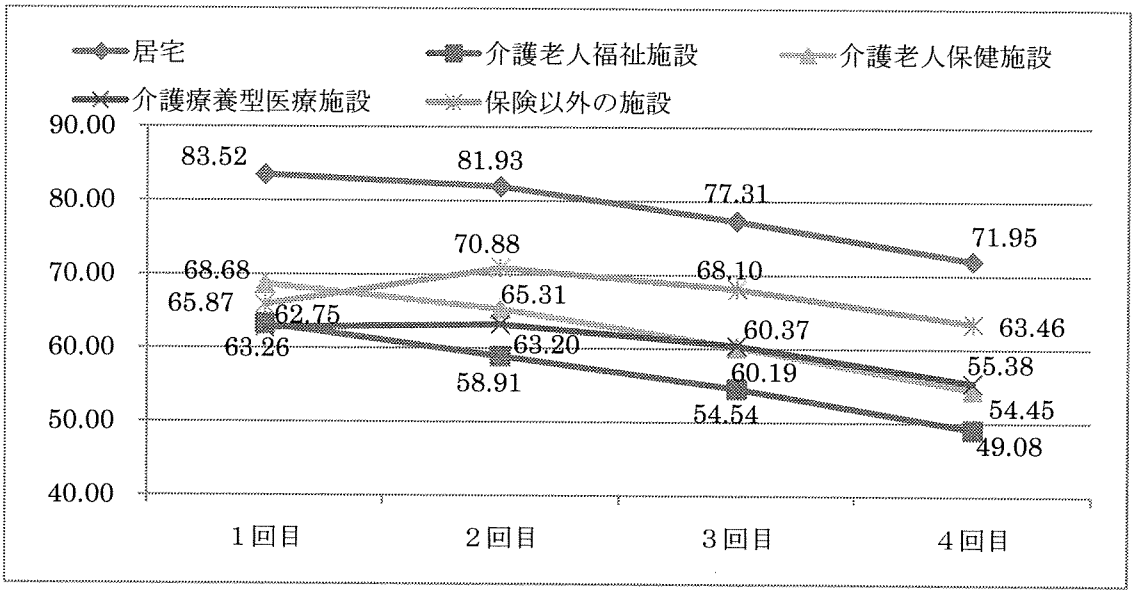

図 3-8 ケア提供場所別第 2 群（移動等関連）の中間評価項目得点の経年的な変化

2） 男女別ケア提供場所別

① 男性

男性は、保険以外の施設において、1 回目から 2 回目にかけて得点が有意に上昇していた。それ以外は、介護老人保健施設の 1 回目から 2 回目、介護療養型医療施設の 1 回目から 2 回目、2 回目から 3 回目を除き、いずれの施設においても認定回数を経るごとに有意に得点が低下していた。

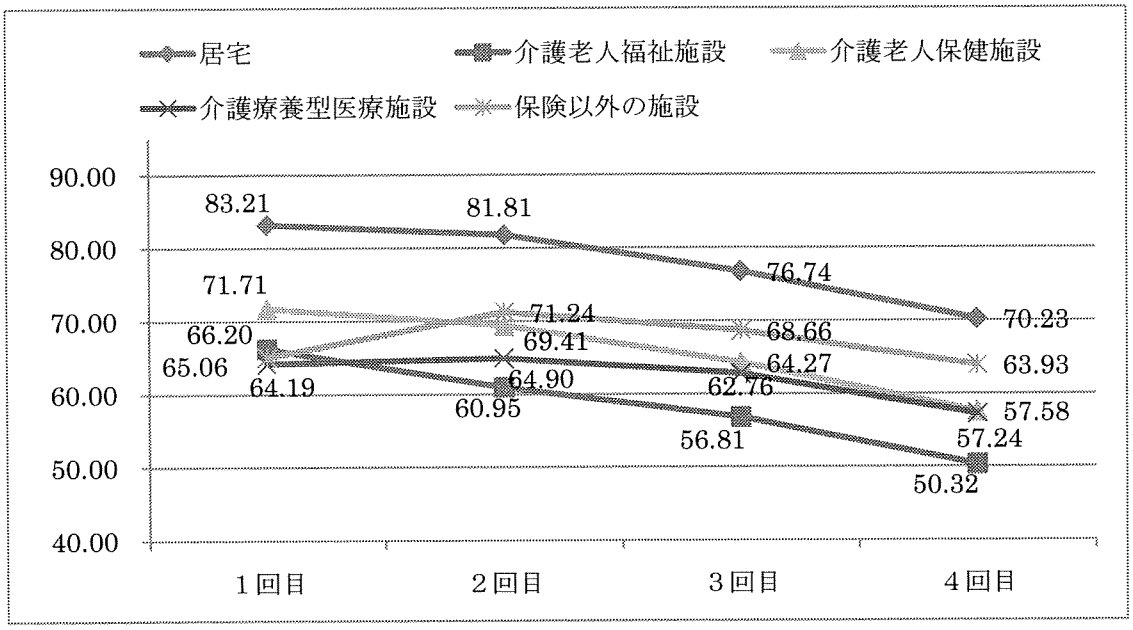

図 3-9　男性のケア提供場所別第 2 群（移動等関連）の中間評価項目得点の経年的な変化

② 女性

女性は、保険以外の施設において、1 回目から 2 回目にかけて得点が有意に上昇していた。これ以外では、介護療養型施設において、1 回目から 2 回目にかけて有意差が見られなかったが、これ以外は、いずれの施設においても認定回数を経るごとに有意に得点が低下していた。

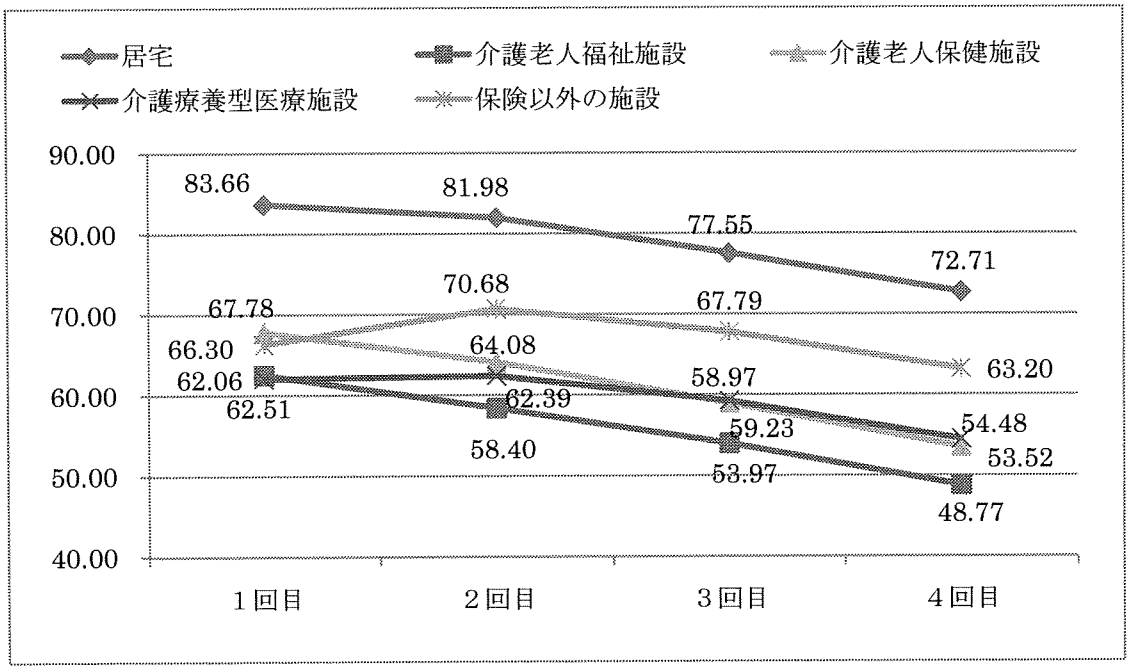

図 3-10　女性のケア提供場所別第 2 群（移動等関連）の中間評価項目得点の経年的な変化

7. 第３群（複雑な動作関連）の経年的変化

1） ケア提供場所別

ケア提供場所別に要介護高齢者における第 3 群（複雑な動作等関連）の中間評価項目得点を比較した結果、保険以外の施設において、1 回目から 2 回目にかけて得点が有意に上昇していた。

その他においては、介護療養型施設において、1 回目から 2 回目、2 回目から 3 回目にかけて有意差が見られなかった以外については、いずれの施設においても認定回数を経るごとに有意に得点が低下していた。

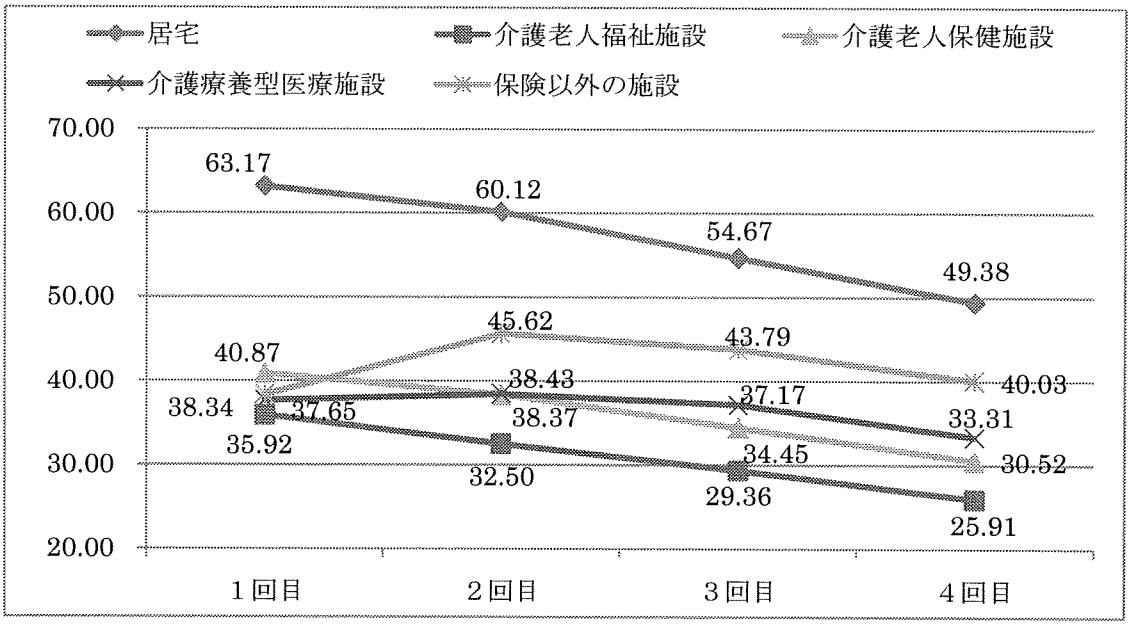

図 3-11 ケア提供場所別第 3 群（複雑な動作等関連）の中間評価項目得点の経年的変化

2） 男女別ケア提供場所別

① 男性

男性は、保険以外の施設において、1 回目から 2 回目にかけて得点が有意に上昇していた。それ以外は、介護老人保健施設の 1 回目から 2 回目、介護療養型医療施設の 1 回目から 2 回目、2 回目から 3 回目を除き、いずれの施設においても認定回数を経るごとに有意に得点が低下していた。